

なお、右の「高」本と徳島県立図書館所蔵本との異同は次の通りである。数字は表のものと一致する。

市立大学国文学研究室に大変お世話になった。ここに記して謝意を表する次第である。

森鷗外文学評論の研究(一)

——「小説論」改稿の意図と方法

嘉 部 嘉 隆

森鷗外の文学活動が、「小説論」をもって始まるという見方には異論は出ないであろう。それでは、「小説論」はいかなる方法で書かれ、いかなる論理が展開され、いかなる意図をもって発表されたのであろうか。「小説論」は鷗外の文学活動の出発点でありながらこの論に関する研究は比較的少ないように思われる。しかし、鷗外の評論活動を検討して行くには、「小説論」は無視できないと言えよう。

「小説論」は明治二二年一月三日の「読売新聞」の附録に発表された。^(注1)のちに、明治二五年一月「しがらみ草紙」第二八号に「医

にして小説を論ず」と改題の上、再録され、さらに明治二九年には「医学の説より出でたる小説論」として「つきくさ」に収録された。^(注2)

改題されていることから推測できるが、本文にはかなり異同がある。そして、この異同をたどることによって、鷗外の方法なり意図なりを、ある程度把握することが出来るのである。小堀桂一郎氏は「青年期の鷗外を批判的に論じよう」と思うときには読売新聞の初出

稿に遡って読むことが必要である」と言うが、しかし小堀氏は論中において必ずしも三種の本文を突き合わせた上で、初出稿を読まねばならない必要性を論証しているわけではない。概して初出の問題にし、「つきくさ」の本文には触れるところもあるが、再出の本文には殆ど触れていない。むしろ、初出の本文にも問題はあつたが、本文の改訂のあとをたどることによって、鷗外のその時々々の問題が明瞭に浮び上つて来るのである。そして、その方により大きな問題が含まれているように思われる。^(注3)

「小説論」は次のように始まる。

泰西の醫説は我詩説と相類す彼の祖述する所の伊勃加羅的は即ち我李杜なり」とは昨年の暮に没せられし小永井小舟君が永坂石埭を送るの序に醫術と詩法とを對比したるの言なり

天下何れに適いか好對なからん況んや文人の筆を弄して故らに奇を求むるをや然れども妄に「アナログン」を籍て論を立つるは論理の許さざる所なれば余は復た此に出づるを欲せざるな

り

余が醫にして小説論を呷するは此の如く淺薄なる意匠に基くには非ざるなり知ずや今日歐洲諸國に瀾漫する一派の小説は實に其源を醫學に發したるを

この書き出しに關しては、たとえば神田孝夫氏は次のように解釈(注5)している。

ゾラとクロード・ベルナルとの關係を説き、その実験小説論が文学の正道に違たがうゆえんを論じて、医学の領域と文学の領域を明確に區別し、(引用文略)と結論するのは、冒頭に小永井某の言を引いて、医と文の粗雑な混同類比説を反駁したとと相俟つて、まことに適切な処置であつたと言わねばならぬ。

かれはこの一文を以て、科学的に嚴密な医学者としての森林太郎と、文芸に遊ぶ鷗外漁史との二人格を、同時に救う一石二鳥の効果を期待し得るからである。

また、小堀桂一郎氏は、

一見奇妙なこの書き出しは、おそらくは、自分が医家にして小説を論ずるのはこの小永井某の真似というわけではない、ということであり、初めて文壇に声を放つものとしての慎重な配慮に基づいていよう。

と、神田氏と似たような意見を展開している。(注6)

たしかに、これらの神田氏や小堀氏の意見は、書き出しの部分だけを問題にするとすれば、至極もつともにも思える。しかし、これら

の意見は、「小説論」という題名の下についた、(Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien)というただし書きの意味を見落してしまっている。もし神田氏や小堀氏の見方を肯定するならば、このゴットシャルという名前を出すことは、鷗外にとってあまり有利な材料ではないように思われるのである。というのは、たとえば鷗外が小永井小舟の發想を否定した上で

余が醫にして小説論を呷するは此の如く淺薄なる意匠に基くには非ざるなり知ずや今日歐洲諸國に瀾漫する一派の小説は實に其源を醫學に發したるを

と書くとき、ゴットシャルの名前を出さない方が、いかにも鷗外自身の發見と着想とによつてゐる感が強くなり、これから文壇に出てゆこうとしている者にとっては、はるかに読者に対して強い印象を与えることになりはしないかと思われるのである。ゴットシャルの名前を出すことは、たとえば「知ずや」以下の知識がゴットシャルによつてゐるという感じを強く出してしまふ。とすれば、せつかくの適切な処置も、慎重な配慮も、すべてゴットシャルの借り物という印象(とはいへ、小永井小舟とゴットシャルではだいぶちがうかもしれない。しかし、当時の読売新聞の読者にとつて、どれほどちがつた意味を持つことができたか。せいぜいゴットシャルが外国人であるため、何となく權威的であつたかもしれないという程度であらう)によつて帳消しになりにかねないのである。にもかかわらず、

たしかにこれら二冊の目録と見比べると、書き出しの音分な
けを問題にするとすれば、至極もつとも思える。しかし、これら

ここで鵬外がゴットシャルの名前を持ち出すには、それなりの意図
なり狙いなりがあったにちがいないと考える方が妥当であろう。

当時の鵬外の立場を考えてみれば、極く少数の文学愛好者の間で
は、ドイツ文学あるいは外国文学に詳しいドイツ帰りの軍医であ
るということは知られていたかもしれない。しかし、一般には(つ
まり新聞の読者にとっては)全く知られていないか、あるいはせい
ぜいドイツ帰りの軍医という程度の認識であったであろう。この点
を考慮すると、鵬外が最初の文学関係の論を発表するに当って、そ
れなりの配慮を加えたであろうと考えるのは不自然ではあるまい。
そして、その配慮が、題名の下に“Cfr. Rudolph von Gottschall,
Studien”、とつけ加えることだったのである。

それでは、このようにゴットシャルの名前を持ち出すことが、ど
のような効果をあげることになるだろうか。まず、何と云っても、
鵬外の発言を強力に権威づけることになるであろう。ゴットシャル
の名前が、日本に知られているにしろいないにしろ、ドイツ留学か
ら帰朝早々の単なる軍医よりは、はるかに文学的に権威あるものと
して見られても当時としてはむりもない面もあるであろう。さら
に、その名前が、ドイツより帰朝早々の人によって持ち出されたの
であるから、なお効果的であったと見てもよいと思われる。

しかも、このゴットシャルの名前の使い方がきわめて巧妙であ
る。本文中には、ゴットシャルは一箇所に出て来るだけである。す
なわち、

あるため、何となく権威的であったかもしれないという程度であ
う)によって帳消しになりかねないのである。にもかかわらず、

「ドイスレリー」の英吉利に於ける「ドーデー」の法蘭西に於
ける其實験の成績を使用するや變幻靈活、固より「ゾラー」の
比に非ず筆墨の間、時に水花鏡月の韻を存ず之を華實兼ね收む
るものと謂ふも可なり撒遜の學者「ゴットシャル」は之を喚で
寫真小説(フオートグラーフイツセル、ロマン)と做す

という部分である。この部分は、全文の殆ど末尾といつていいほど
のところにあり、全体から見て決して重要な役割を持たされてはい
ない。こういう部分では、鵬外は律義にゴットシャルの名前などを
持ち出して、いかにも公明正大に他人のことばは他人のことばとし
て引用しているように見せかける。これはゴットシャルに拠ってい
る部分がここだけだという錯覚さえ読者にもたせかねないのであ
る。本文をよくよく吟味すれば、他に他人の文章やことばの引用は
全く見当らない。ということとは、ゴットシャルの名前が、本文中に
全く出て来なければ、題名の下に記した“Cfr. Rudolph von Got
tschall, Studien”、という註記が、本文全体の背景にあると考えら
れるのに対し、ゴットシャルの名前が一箇所出て来ることによつ
て、ゴットシャルに拠っているのが、名前の出て来る部分だけに限
定されるという感じを強くするのである。

むしろ、それは錯覚であり感じに過ぎない。本文を論理的にたど
って行けば、ゴットシャルが鵬外の論の全体の下敷きになっている
ことは明らかである。しかし、それにはあくまで本文を論理の筋道
に添って分析してみることが必要である。よほど注意して読まなけ

れば、錯覚は生じるし、またそういう錯覚を起こさせるような書き方なのである。

とは言え、鷗外が全面的にゴットシャルに依拠していることは、小堀桂一郎氏によって詳細に報告されている。^(註9) それによれば、

クロード・ベルナルの所説も、鷗外はその独訳本を見たというわけではなく、全くゴットシャルを通じて知る。

とのことであり、『クロード・ベルナル』は曰く「先づ庖厨を過るが如し」とまでの、ゴットシャルの原文を示している。また神田孝夫氏は、

鷗外に深い感銘を与え、かれの思考に引き組みと筋道をつけてくれた「小説論」とは、この反自然主義の見地に立つて、「フランスにおける自然主義小説と写真小説」と題して草した九〇ページの力作である。かれはここで、ゾラの唱道する自然主義が優に「一系の美学」をなすことを喝破し、「実験小説論」その他のエッセイを引用しながら詳しくこれを解説して、その誤れるゆえんを理論的に指摘した。ついでゾラの小説、とりわけ「ナナ」の梗概を十数頁にわたって述べて、誤れる美学がいかに醜惡な結果になるかを具体的に明示した上、転じて同じく自然主義に組みしながらもゾラと異なるドーデーを取上げ、その特性を語りながら、美しい空想を保つ一部の作品を称した。

と、ゴットシャルの論を要約紹介している。^(註9)

ゴットシャルの論中にゾラの作品の梗概が記されているということは、あるいは鷗外はゾラの作品そのものを読まずに、この論を立てたということも考えられなくはない。ゾラの作品に、とにかく目を通していれば、

「ルゴン」の福と題せる首巻より土地と題せる新篇に至るまで實に化學所の日記に非ざれば則ち解剖局の過報なり

などという論が出て来る筈はない。このあたりはだれが読んでも不審を抱くと思われるが、吉田精一氏も

これは必ずしも当を得た批評ではない。少なくともゾラの傑作と称される類は「事實の範圍内に彷徨して満足」した産物ではなく、空想が潤沢である。彼がゾラよりまされりとしたドーデーは、実はゾラよりはるかに小さな存在にすぎない。^(註10)

と評している。

神田氏や小堀氏の指摘などを併せ考えても、鷗外の見論はすべてゴットシャルに拠っており、鷗外はまさにゴットシャルを紹介したに過ぎないと言えよう。そういう意味では (Cfr. Rado Ihn von Gottschall, Studien) は、まさに鷗外の論旨を支え、背後に權威として存在しているのである。しかし「Cfr.」とはきわめてあいまいでもある。どの程度まで鷗外がゴットシャルに拠っているのかというのを必ずしもはっきりと示しているとは言がたい。事実だけをゴットシャルに得ているのか、それとも論の発想そのもののまでゴットシャルに得ているのか。その点を鷗外はあいまい

にしたままで、最初の部分では「余が医にして小説論を申するは」と言い、最後の部分に於ては、「余は医なり（中略）『イデアール』は吾党の北斗なり（中略）読者諸君よ彼の目的の爲めに北斗を忘るゝの徒に与すること莫れ」と書くとき、鵬外は自らのオリジナリティーを主張しているかの感を与えるのである。

ここで鵬外は、ゴットシャルというドイツの文学者の名前を自己の背後にある權威としてたくみに利用しつつ、しかも自己が文学通であり、ひとかどの文学觀をそなえた人物であることを示して、文壇に出てゆくとしたのである。坪内逍遙のように「文学士」という肩書もなく、文学とは全く専門を異にする「医学士 森林太郎」が、文壇に産声をあげるための、まことに考えた、きわめて巧妙な方法であったと言える。

二

「小説論」の再稿「醫にして小説を論ず」は、『しがらみ草紙』第二十八号の「山房論文」のうち、「其九 エミル・ゾラが没理想」に「附録」として収録されている。同じ「附録」には「二」として『国民之友』五十号に載った「『文學ト自然』ヲ讀ム」が「文學と自然」と改題の上、大幅に改稿されて収録されている。「醫にして小説を論ず」は、題名の左側に「讀賣新聞明治廿二年一月」と注記され、あたかも初出そのままの再録であるかのような形態をとっている。しかも本文はかなり巧妙に、鵬外の意図を実現すべく改変されているのである。たとえば、再稿の書き出しは次のごとくで

ある。

泰西の醫説は我詩説と相類す、かれが祖述する所のピボクラアテスは即ち我李杜なりとは、去年の暮に歿りし小舟子が石埭居士を送る序に醫と詩とを比べたる言なり。今の歐羅巴にて盛行はるゝ小説の一派は、醫學に縁あるものなれば、わが醫にしてこれを論ぜむも、あながち他人の領地を侵したるやうにはおもはれざるべし。

これを初出の本文と比較すると、たとえば「彼の」↓「かれが」、「昨年」↓「去年」、「没せられし」↓「歿りし」、「小永井小舟君」↓「小舟子」、「永坂石埭」↓「石埭居士」、「送るの序」↓「送る序」、「醫術と詩法とを對比したるの」↓「醫と詩とを比べたる」というように、ちょっとしたことばの変更のように見える。後半の部分は、初出をかなり省略し、叙述の順序も多少変え、簡略にわかり易くなっている。

しかし、注意しなければならないのは、冒頭の一段落でさえ、これほど文章を改竄しているにも拘らず、「昨年」を「去年」と変えただけで、明治二十五年一月号に掲載される文章を、あたかも明治二十二年に発表当時の文章のごとく擬装していることである。本文にこれだけ手を入れているのであるから、「去年」を「明治二十一年」とするなり、あるいは何らかの註記を加えてもおかしきはあるまい。また、後半の「わが醫にしてこれを論ぜむも、あながち他人の領地を侵したるやうにはおもはれざるべし」も同様である。ここでは、明治二十二年一月の「医学士 森林太郎」を強調している。

明治二十五年における森鷗外なら、決して「他人の領地を侵した」などとは思われる筈はないのである。こうした配慮の上で、鷗外はあえて「(讀賣新聞明治廿二年一月)」と註記し、いかにも初出そのままのような体裁をとって、文章を自らの都合のよいように変えてしまっているのである。これは、当然のことながら「附録」の「本文」とも関連してくるからである。つまり鷗外は「本文」である「エミル・ゾラが没理想」という論を補強するため、この「附録」を収載しているのである。(その点については、「文学と自然と」に關しても同様である) こんなことは、自分ではや何年も前から主張していたのだということを示すために、附録として「醫にして小説を論ず」という論をつけ加えたのである。しかも、なお注意しなければならぬのは、ここでは初出にあった“Cfr. Rudolph von Gottschall, studien”という註記がなくなり、さらに初出の最後の部分に出て来たゴットシャルの名前が削除されていることである。再稿では、まさにこの論の主旨が鷗外自身の発想であるかのように変っているのである。初出を尊重するのであれば、当然ゴットシャルを削るわけにはゆかないであろう。題名を「医にして小説を論ず」と変えたのも、あくまで自己の発想によるものということを印象づけるためではないかと思われる。そして、ここで鷗外自身の発想であるかのように装わねばならないのは、「エミル・ゾラが没理想」が、類似的の論旨であり、それを自らの発想として主張するには、早くから発表していた論と称するものも、やはり自らの発想でなければならなかったからであろう。

三

「小説論」の三稿は、「醫學の説より出でたる小説論」として、『つききさ』に収められている。ここではもはや「柵草紙の山房論文」中の「エミル・ゾラが没理想」からは離されて、「今の諸家の小説論を讀みて」のあとに、附録のような体裁で題名の前に行をあげず、本文と同じ大きさの活字で題名を組んで、収録されている。まさに組み合わせは融通無礙という感じである。

三稿の本文は、初稿とも再稿とも大幅に異っている。著しい特色は、冒頭と最後の部分との削除にある。論としては、余計な説明や言訳がなく、きわめてすっきりとした感じを与える。書き出しが、エミル・ゾラは佛蘭西プロワンスの人なり。今の所謂自然主義の小説をば、ゾラ名づけて試験小説となさむとす。

と始まり、最後が

事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて做し得べきのみ。ドオデエがゾラに優れるはこゝに得る所ありてならむ。(明治二十二年一月)

となつて終っている。用語に関しては、概して再稿を受け継いでいる。たとえば初稿の「実験」は再稿では「試験」になり、三稿でも同じである。異っているのは、初稿が「覺悟」であつたものが、再稿では「悟」になり、(ただし、ルビはいずれも「イントユイション」

「インツイチオン」と表記はかわるが同じことばが付されている。三稿にはない）三稿では「空想」と、わかり易くなっている。三稿の本文は、比較できるかぎりにおいては、多少の省略などはあっても、殆ど再稿を受け継いでいるといえる。異なるのは、三稿が再稿の冒頭の一段落と最後の一段落を削除していることである。そして、この削除に、鷗外のそれぞれの稿を成した際の立場が読み取れるのではないかと思われるのである。

三稿において削除された部分は、初・再稿に於てはいわば執筆者の立場を説明している部分である。たとえば冒頭の部分に於ては、「わが医にしてこれを論ぜむ」とか、最終段落に於ては「われは医なり、自然科学者なり」というような箇所である。これらの部分は、たしかに執筆者がこのような論を展開するために、自らの立場を釈明しているという感がなくはない。論としては夾雑物であるばかりでなく、少々くどいという感もあろう。しかし、原型を尊重して再録するならば当然削除されないでいい。別にこの部分がつけ加っても論旨にちがいはないのである。

それではなぜ執筆者の立場を説明している部分が削除されたのか。他にもいろいろな理由が考えられるが、その主なものが前述のようにそれぞれの稿を成した際の鷗外の立場である。初稿執筆時は、鷗外は文壇的には全く無名であった。従って自らの医者としての立場を主張するとともに、ゴットシャルの威光も必要であった。再稿執筆時には鷗外は軍医であるとともに、文壇の論客でもあつ

た。『しがらみ草紙』の主宰者であり、「舞姫」の作者であり、翻訳者としても知名であった。三文字屋金平（内田魯庵）が『文学者となる法』^(註13)で、

鷗外先生は日本のハルトマンなり鷗外先生は日本第一の審美哲学者なり鷗外先生は日本第一の物識なり。鷗外先生は「轍」を弁ずるに四頁二百行余を費し芝廬園を退治するに前後二十余頁を無駄にせしほどの大家也。若し一言粗忽をして先生の御機嫌を損する事あれば忽ち二十三頁のお世話を掛くる恐あればゆめ謹んで決して危きに近寄るべからず。

とからかったように、もはや鷗外はこのころ文壇の権威であった。それゆえ、ゴットシャルの権威は必要でなかっただけでなく、この程度の知識や論に種本があったのでは、鷗外の権威を損ねることになりかねないのである。そこで鷗外は、初出を尊重するらしく見せるため医者としての立場を強調するとともに、都合の悪いゴットシャルを消し去ったのである。

三稿に於ては、医者としての立場を強調することさえ好ましくない。というのは、鷗外はまさに文壇の最高権威者だったからである。没理想論争において、鷗外は逍遙を負かしたかの感を抱かせた^(註13)。もはや文壇において鷗外に対抗できる論客はいないと言っている。

鷗外自身もまた、『つきくさ』の叙に、

己が批評の根拠としてハルトマンの標準的審美學を取つてか

ら、審美學といふ一科學の我國に於ける價值と、ハルトマンといふ一學者の我國に於ける勢力とに多少の影響を及ぼしたことは、反對者でも認めぬ譯には行かぬ。(中略)今では専門の審美學者といふ人々さへ出て來たのは、少くもその動因の一つとして己が明治二十二年から二十七年まで、二三の同志の友達と一しよに出した柵草紙の中の、極めて稗い論文に促されたものだといつても過言ではあるまい。

と、その評論活動に對し自信満々である。

それどころか、

今文だんの神よといふ鷗外が言葉として、われはたとへ世の人に一葉崇拜のあざけりを受けんまでも、此人にまことの詩人といふ名を送る事を惜しまざるべしといひ、(中略)我々文士の身として、一度うけなば死すとも憾なかるまじき事ぞや、君が喜びいかゞぞとうらやまる。二人はたと狂せるやうに喜びてかへられき。

(金田)

と、平田禿木や戸川秋骨もこのように見ているのである。「文壇の神」鷗外に於て、医者^(金田)の立場を強調することは、文学が余技ととられかねない危険を含むのである。とすれば自らを医者とする文章を削除することは当然と見る事ができよう。このことは当然再稿の題名をも変更させることとなつたのである。

「小説論」の三つの稿を比較すると、鷗外のその時々の思考方法がよく読みとれる。「小説論」の改稿は、まさに鷗外が自己を権威

化する過程であつたと言えよう。

註

- 1 「小説論」の引用は、岩波書店最新版『鷗外全集』第三十八卷所収の本文に拠る。小堀桂一郎著『若き日の森鷗外』(東京大学出版会昭44)にも複製されているが、全集と若干の相異点があり、どちらが正しいかはわからない。初出は確認できなかった。

- 2 「医にして小説を論ず」の本文は、『しがらみ草紙』第二十八号(明25・1・25)に拠る。

- 3 「医学の説より出でたる小説論」の本文は『つきくさ』初版(春陽堂明29・12・18)に拠る。なお、三種の本文のいずれも、ルビ・傍点の類は、引用に際しては省略することを原則とした。

- 4 長谷川泉氏『近代日本文学の位相 上』(桜楓社 昭49)中の「近代評論の系譜」には、「小説論」の三種の稿の相異について触れられ、論じられているが、拙稿とは視点を異にするようである。

- 5 神田孝夫「鷗外初期の文芸評論」(『比較文学研究』6号昭32・1・12)

- 6 「若き日の森鷗外」のうち「文学觀の系譜——一、『小説論』「クロウド、ベルナル」曰く今の学問は視察(略)と實驗(略)との二に基くなり(以下略)」

という部分もあるが、ゾラがこのことばを利用しているという意味での引用であるので、ゴットシャルの引用とは少々意味が異なる。

8 注6に同じ

9 注5に同じ

10 『近代文芸評論史 明治篇』（至文堂 昭50）のうち「第四章 批評原理の追求 1 森鷗外」

11 「比較（対照・参照）せよ」（相良守峯『大独和辞典』博友社、

による）だから、必ずしも出典を示している必要はなく、他の解釈も可能であろう。

12 『文学者となる法』（右文社 明27）この本文は明治二十六年中

には出来上っていたと思われるが、それでも『しがらみ草紙』第二八号よりは二年ほどあとになる。

13 没理想論争そのものは、論点のくいちがいなどから、必ずしも

鵬外が勝って、逍遙が負けたとは言い難い面もあり、現在でもなお、問題を残しているが、いずれ続稿で論じたい。しかし、一般的には逍遙が言い負かされたという印象があったことも事実であろう。

14 樋口一葉「水の上日記」明29・5・2本文の引用は「一葉全集」第四卷（筑摩書房 昭29）によった。

日本文芸学10号 日本文芸学会

高知女子大国文11号

国文学51・52号 関西大学

共立女子大紀要 21輯

高知大学学術研究報告6号

甲南大学紀要文学編17号

女子大国文75・77号 京都女子大学

語文研究38号 九州大学国語国文学会

国立国語研究所年報25集

金城国文60集 金城学院大学国文学会

国語国文学研究9号 熊本大学

学苑421・432号 昭和女子大学

国学院雑誌75巻12号・76巻11号

国学院大学紀要13号

駒沢国文12号 駒沢大学

国語研究38号 国学院大学

野州国文学15号 国学院大学栃木短大

文芸研究32・33号 明治大学文学部

武庫川国文7号 武庫川女子大学

語文40号 日本大学

（一二〇頁より続く）